

論文

交流経験が保育科学生の知的障害児(者)に対するイメージに及ぼす効果
—A 短期大学における施設実習前後のアンケート調査から—長谷中 崇 志
高 瀬 慎 二
大 崎 千 秋

I. はじめに

社会福祉政策の基本的方向として、子ども・高齢者・障害者など全ての人々が一人ひとりの暮らしと生きがいを共に創り、共に高めあう「地域共生社会」を構築していくことが提唱されている(厚生労働省 2016:201-227)。そして、地域共生社会の実現に向けて、「個人の尊厳が尊重され、多様性を認め合うことができる地域社会」づくりの重要性を指摘した上で、「地域社会を実現していくためには、社会的孤立や社会的排除といった現実を生じうる課題を直視していくことが必要」であり、社会的孤立や社会的排除の解消を進めていくことが強調されている(厚生労働省 2017:4)。

そのような背景のもと、地域共生社会の実現に向けて解決を図っていくことが求められる課題の一つとして、障害児(者)に対する差別・偏見の問題があげられる(内閣府 2017)。障害児(者)に対するイメージに関する先行研究では、理念的観念的レベルでは好意的であるが、現実的具体的レベルでは好意的でない「総論賛成各論反対」といわれる結果が報告されており(栗田ら 2014; 生川 1998; 大谷 2002)、今後、障害児(者)に対する肯定的・共感的なイメージを育み、社会的排除を解消していくための「社会的包摂にむけた福祉教育」プログラムを確立していくことが研究課題となっている(全国社会福祉協議会 2014)。また、保育・教育分野において、インクルーシブ保育・教育が推進されており、障害児(者)に対する理解を深め、肯定的なイメージを持つ保育者養成が求められている。しかし、先行研究において、保育者を目指す学生の障害児(者)へのイメージは必ずしも好意的であるとは限らないことが示されており(西川 2019; 大谷 2002)、障害児(者)に対する肯定的なイメージを育む教育プログラム開発が今後の課題となっている。特に障害児(者)観の変化に関する先行研究では、その効果に関する実証研究は少なく(青戸ら 2014; 渡辺ら 2003)、研究の蓄積が求められている。これまでの知見では、障

害児（者）との交流経験の有無が障害児（者）観に影響を及ぼすことが示されており、受容的・肯定的な変化をもたらす結果（藤井 2000；藤田 2015）が報告されているが、一方で、変化がみられなかった結果（青戸ら 2014）や否定的な変化をもたらす結果（西川 2019；大谷 2001；田川ら 1992）も報告されており、交流経験が障害児（者）観に及ぼす影響の結果は必ずしも一致していない。さらに、先行研究において、交流経験に加え、交流の質が障害児（者）観に影響を及ぼす要因であることが指摘されているが（河内 2006；楠見 2017；Narukawa et al. 2004；縄中ら 2011；大谷 2002）、交流の質に焦点を当てた研究は限られている（楠見 2016）。

以上のことをふまえ本研究では、保育科学生に実施した施設実習前後の調査結果をもとに、知的障害児（者）との交流経験および交流の質（交流内容）の観点から、知的障害児（者）に対するイメージに及ぼす効果を明らかにすることを目的とする。本研究は、2017年度のプレ調査（大崎ら 2017）をふまえた継続研究である。

Ⅱ. 研究の方法

(1) 調査対象

A 短期大学保育科に在籍する学生 151 名（2 年生：女子 150 名、男子 1 名）を対象に、施設実習指導開始時の 2018 年 3 月と施設実習を終えた 8 月に記名自記式のアンケート調査を実施した。本稿では便宜上、3 月実施、8 月実施のアンケート調査をそれぞれ実習前、実習後アンケートと呼称する。

(2) 調査内容

調査内容は、①これまでの知的障害児（者）との交流経験、②今回の施設実習での知的障害児（者）との交流経験（実習後のみ実施）、③現在の知的障害児（者）へのイメージ（実習前後で実施）、④知的障害児への教育に関する考え方、⑤知的障害児（者）に対する態度について回答を求めた。

(3) 倫理的配慮

研究対象者に、研究目的、結果を研究発表（学会・論文）に用いること、回答の拒否権があることを配布文書と口頭で説明し、同意を得た。得られたデータは匿名化し、個人が特定されないように配慮した。

Ⅲ. 結果

(1) 調査対象者の基本属性

実習前後の知的障害児（者）に対するイメージ変化を検討するため、実習後アンケート実施時までには施設実習を終えた151名（女子150名、男子1名）を分析の対象とした。このうち、57名が障害児（者）支援施設、94名が乳児院・児童養護施設で実習を行った。この実習の施設種別に知的障害児（者）との交流経験の有無をまとめたものが表1である。知的障害児（者）との交流経験の有無の割合については障害児（者）支援施設（有り：40.4%、無し：54.4%）と乳児院・児童養護施設（有り：46.8%、無し：50.0%）で同程度となっていた。

表1 実習施設種別と知的障害児（者）との交流経験の有無

実習施設種別	知的障害児（者）との交流経験						計 n
	有り		無し		無記入		
	n	%	n	%	n	%	n
障害児（者）支援施設	23	40.4	31	54.4	3	5.3	57
乳児院・児童養護施設	44	46.8	47	50.0	3	3.2	94

(2) 交流経験によるイメージの変化

本稿では、施設実習での知的障害児（者）との交流経験が知的障害児（者）のイメージに及ぼす効果を検討するため、「(2) 調査内容」に挙げた「②今回の施設実習での知的障害児（者）との交流経験」と「③現在の知的障害児（者）へのイメージ」との関係について焦点を当て検討を行った。施設実習での知的障害児（者）との交流経験として、①コミュニケーションをとる機会（経験あり：64名、経験なし：68名）、②日常生活支援（衣服の着脱、身の回りの支援、移動支援、就労支援）（経験あり：53名、経験なし：84名）、③身体介助（食事、入浴、排泄）（経験あり：46名、経験なし：93名）の3種の質の異なる経験の有無を調査した。知的障害児（者）へのイメージについては5段階（1～5）で評定を求め、評定値が高いほど肯定的なイメージを持っていることを意味している。

上記3項目の施設実習での知的障害児（者）との交流経験の有無と実習前後でのイメージの評定値について、図1に示した。これらの交流経験（有り、無し）と実習参加（前、後）について2要因混合の分散分析を行ったところ、3項目すべてでイメージの評定値に関し

て交流経験の有無（コミュニケーションをとる機会： $F_{1,130} = 5.17, p < .05$ 、日常生活支援： $F_{1,135} = 24.51, p < .01$ 、身体介助： $F_{1,137} = 23.68, p < .01$ ）、実習参加（コミュニケーションをとる機会： $F_{1,130} = 7.19, p < .01$ 、日常生活支援： $F_{1,135} = 19.44, p < .01$ 、身体介助： $F_{1,137} = 24.03, p < .01$ ）という要因について主効果が認められ、また、兩要因間に交互作用（コミュニケーションをとる機会 v.s. 実習参加： $F_{1,130} = 35.87, p < .01$ 、日常生活支援 v.s. 実習参加： $F_{1,135} = 13.79, p < .01$ 、身体介助 v.s. 実習参加： $F_{1,137} = 29.15, p < .01$ ）が認められた。そのため、下位検定を行ったところ、交流経験の種類に関係なく、実習において知的障害児（者）との交流経験があると実習前よりも知的障害児（者）に対するイメージの評定値は高くなっていった（ $p < .01$ ）が、交流経験がない場合には実習前後での評定値に差は認められなかった。さらに、実習後で比較すると交流経験がある学生は、ない学生よりも評定値が高くなっていった（ $p < .01$ ）。

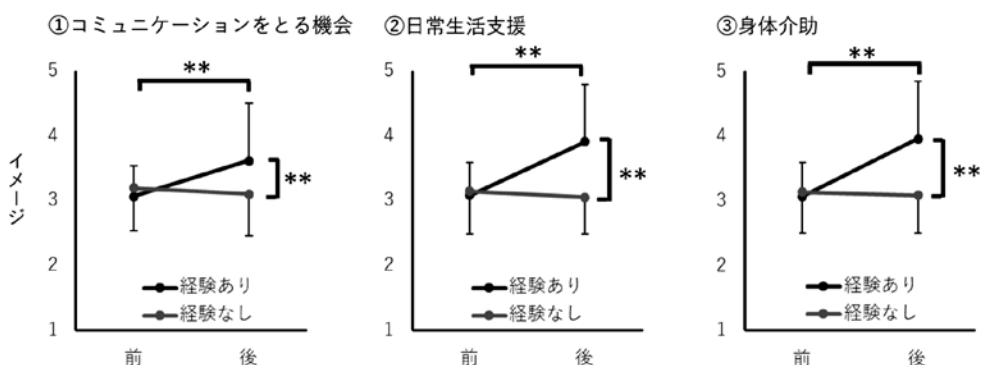


図 1 知的障害児（者）との交流経験の有無と実習前後での知的障害児（者）へのイメージ (** : $p < .01$ 、誤差棒は+あるいは-1標準偏差)

(3) 交流の質とイメージの変化

交流経験のあった学生の実習後のイメージの評定値を交流の質ごとにみると①コミュニケーションをとる機会:3.61 (± 0.88)、②日常生活支援:3.91 (± 0.87)、③身体介助:3.96 (± 0.88) と、身体接触を含むような濃密な交流が必要となるほど知的障害児（者）に対するイメージの評定値も多少ではあるが高くなっていった。実習後の知的障害児(者)へのイメージの評定値に対して交流の質を要因とする1要因の対応のない分散分析を行ったところ、有意傾向となっていた ($F_{2,160} = 2.57, p < .10$)。多重比較において検出力の高いLSD法を用いた場合には、身体介助を行なう経験のあった学生の評定値がコミュニケーションを

とる機会のあった学生の評定値よりも高くなっていた ($p < .05$)。

IV. 考察

本調査によって施設実習での知的障害児(者)との交流が肯定的なイメージの形成に作用していることが明らかになった。実習参加により知的障害児(者)と交流内容の質に関係なく、なんらかの関わりがあった場合には知的障害児(者)に対するイメージが肯定的なものとなることが明確に示された。これは知的障害児(者)との交流が肯定的・受容的变化を生じるとする先行研究(藤井2000; 藤田2015)の結果や障害者支援施設で実習を行った学生の知的障害児(者)へのイメージが肯定的となるとした著者らの先行研究(大崎ら2017)を支持するものである。さらには、交流経験とその効果の関係を検証する先行研究の大半において、交流経験が障害児(者)への態度形成に肯定的な効果を持つ結果が得られている(楠見2016: 215)というレビュー結果と本調査結果は整合的である。先行研究において藤田紀昭氏が述べているように、「障害のある当事者の支援を経験したり、活動を共にしたりすることが障害者のイメージを肯定的なものに変えていくことが明確になった」(藤田2015: 15)といえる。また、交流の質についても、コミュニケーションをとるといった交流内容としては比較的軽易なものから日常生活の支援、身体介助など身体接触を含む濃密な交流が必要となるほど、イメージは肯定的なものとなる傾向が示唆された。先行研究によれば、まだ十分に検討されていないが、①交流経験の有無のみで障害児(者)に対する態度が決定されるわけではないこと(楠見2016)、②交流の質が障害児(者)に対する態度に影響を及ぼす要因であること(河内2006; Keith et al. 2015; 楠見2017; Narukawa et al. 2004; 大谷2002)、③障害児(者)に対する肯定的・否定的態度の形成には、「交流の質を規定する条件」(楠見2017)が影響している可能性があること、がそれぞれ示唆されている。それら先行研究の知見をふまえると、本調査結果は交流の質による影響を受けている可能性がある。しかし、この交流の質がイメージの変化に作用しているかについては、不明確な部分もあるため継続的に調査を行うことで詳細に検証していく必要がある。

V. おわりに

本研究では、保育科学生に実施した施設実習前後の調査結果をもとに、知的障害児(者)との交流経験および交流の質(交流内容)の観点から、知的障害児(者)に対するイメー

ジに及ぼす効果を検証した。その結果、①施設実習での知的障害児（者）との交流が肯定的なイメージの形成に作用していることが明らかとなり、②交流の質（交流内容）についても、コミュニケーション、日常生活の支援、身体介助のどのような内容の関わりでも知的障害児（者）に対するイメージを肯定的にし、深い関わりがそれに対してより効果的に働いている可能性が示唆された。従来の研究では、交流の質の差異について分析されておらず（楠見 2016）、本研究において、交流の質に焦点を当てて検証し、障害児（者）との深い関わりが肯定的なイメージにつながる可能性があるという知見を定量的に示したことは意義があると考えられる。

他面、本研究には以下の限界がある。今回の研究は、交流経験と交流の質（交流内容）に限定した検証であり、その他の影響要因を考慮できていない。先行研究によれば、障害児（者）への態度に影響を及ぼす他の要因として、知識（生川 1998；大谷 2001）や交流の量（楠見 2017）が指摘されている。今後、関連する要因の影響を含めて分析し、結果の信頼性や妥当性を検証することが求められる。また、交流の質を測る尺度について検証する必要がある。本研究では、交流の質を客観的な評価尺度として設定した。しかし、先行研究において、回答者の「主観的な評価としての交流の質」（楠見 2017：189）を捉えて分析することの重要性が指摘されている。今後、交流の質に関する主観的側面からの評価尺度についても検証を進める必要がある。

文 献

- 青戸泰子・平岩恵（2014）「障がい者観の変容に関する一研究—障がいのある児童生徒との交流活動を通して」『岐阜女子大学紀要』 43,77-86.
- 藤井和枝（2000）「知的障害児・者に対する女子短大生の意識の変化(1)—ボランティア活動と施設実習を経過して」『埼玉純真女子短期大学研究紀要』 16,9-26.
- 藤田紀昭（2015）「知的障害者スポーツ大会へのボランティア参加による障害者に対する意識変化に関する研究」『*Doshisha Journal of Health & Sports Science*』 7,9-16.
- 河内清彦（2006）「障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度、友人関係、援助行動、ボランティア活動を中心に」『教育心理学研究』 54,509-521.
- Keith, J. M., Bennetto, L., Rogge, R. D. (2015) *The Relationship Between Contact and Attitudes: Reducing Prejudice Toward Individuals with Intellectual and Developmental*

Disabilities, Research in Developmental Disabilities, 47, 14-26.

厚生労働省(2016)『厚生労働白書』.

厚生労働省・地域力強化検討会(2017)「最終とりまとめ—地域共生社会の実現に向けた新しいステージへ」.

厚生労働省・「わが事・丸ごと」地域共生社会実現本部(2017)『『地域共生社会』の実現に向けて(当面の改革工程)』.

栗田季佳・楠見孝(2014)「障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望」『教育心理学研究』62(1), 64-80.

楠見友輔(2016)「日本における障害児と健常児の交流教育に関するレビューと今後の課題」『特殊教育学研究』54(4), 213-222.

楠見友輔(2017)「知的障害児との交流の質を規定する条件—交流経験の語りの質的分析」『特殊教育学研究』55(4), 189-199.

内閣府(2017)「障害者に関する世論調査」.

生川善雄(1998)「わが国における知的障害児(者)に対する態度研究の現状と課題」『特殊教育学研究』35(4), 67-72.

生川善雄・安河内幹(1992)「精神薄弱児(者)に対する態度と接触経験・ボランティア経験との関係に関する研究—福祉保育教育系女子大生の場合」『発達障害研究』13(4), 302-309.

Narukawa, Y., Maekawa, H., Umetani, T. (2004) *Causal Analysis of Attitude Formation Towards Persons With Intellectual Disabilities*, *The Japanese Journal of Special Education*, 42(6), 497-511.

縄中美穂・水口啓吾・湯沢正通(2011)「発達障害者に対する大学生の認識・態度—接触経験・所属学部・ボランティア経験の影響」『広島大学心理学研究』11,79-88.

西川勝利(2019)「保育科学生 of 障害児・者に対する意識変容に関する一考察—体験実習前後の比較を通して」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』28,90-100.

大崎千秋・長谷中崇志・高瀬慎二(2017)「保育科学生 of 知的障害児(者)観に関する基礎的研究—A 短期大学の施設実習アンケート調査分析から」『名古屋柳城短期大学研究紀要』39,129-141.

大谷博俊(2001)「交流教育における知的障害児に対する健常児の態度形成—態度と事前指導における情報提供, 交流経験, 評価対象となる知的障害児の特定との関連性の検討」

『特殊教育学研究』39（1），17-24.

大谷博俊（2002）「知的障害児（者）に対する健常者の態度に関する研究－大学生の態度と交流経験・接触経験との関連を中心に」『特殊教育学研究』40（2），215-222.

田川元康・由良妙子（1992）「障害児に対する小学生の態度形成－統合教育・交流教育の影響」『和歌山大学教育学部紀要（教育科学）』41（1），1-16.

渡辺弘純・植中慶子（2003）「小学生の障害児（者）に対する態度に及ぼす交流経験の影響」『愛媛大学教育学部紀要（第1部教育科学）』49（2），15-30.

全国社会福祉協議会（2014）「社会的包摂にむけた福祉教育－実践にむけた福祉教育プログラムの提案」.

The Effects of Interactional Experience on Child Care Course Students' Images of Persons with Intellectual Disabilities: Analysis of Questionnaire Survey before and after Practical Training at Welfare Facilities

Hasenaka, Takashi* Takase, Shinji* Osaki, Chiaki*

本稿では、保育科学生に実施した施設実習前後の調査結果をもとに、知的障害児（者）との交流経験および交流の質（交流経験の内容）の観点から、知的障害児（者）に対するイメージに及ぼす効果を検証した。その結果、①施設実習での知的障害児（者）との交流が肯定的なイメージの形成に作用していることが明らかとなり、②交流の質（交流内容）についても、コミュニケーション、日常生活の支援、身体介助のどのような内容の関わりでも知的障害児（者）に対するイメージを肯定的にし、深い関わりがそれに対してより効果的に働いている可能性が示唆された。

キーワード：地域共生社会、保育科学生、知的障害児（者）、交流経験、交流の質

